

第1章 対象資料と研究方法について

第1節 対象動物と研究の方法

本研究では、オホーツク文化において、これまでに飼養されたと指摘されたことのある(1)イヌ、(2)イノシシ類、(3)トナカイ、(4)ヒグマを取り上げ、それぞれの利用内容を考古資料に基づく実証的方法によって復元することを通じて、海獣狩猟文化における動物飼養の意味について検討することを目的としている。なお、前述したように、本研究で中心的に取り扱う時代は、海洋適応を高めていく続縄文時代から海獣狩猟文化として成立したオホーツク文化期にかけてであるが、動物の家畜化を証明するためには、それ以前の利用内容との差異を見出すことが必要であるため、北海道の例に限って、縄文時代についても検討対象に含めることとした。

本研究で取り上げる4種の動物については、①遺存体、②遺存体を素材とした製品、③各種素材からなる動物意匠遺物、の集成に基づいた利用内容の復元を試みることとする。従来、動物利用の問題については、生業に関わる視点から、①の遺存体の検討が特に重視される傾向にあった。しかし、動物を飼養する目的がその経済性のみにあるわけではないことは、ニブフやコリヤーク、チュクチといった北東アジアの諸民族がイヌを宗教儀礼に用いる例からも見て取ることができる(Ivanov1956、Antropova1956、Lydia1973)。そのため、本研究では、道具素材としての動物や意匠対象としての動物という側面を加味することによって、対象とした動物の利用内容や文化内での位置づけについての総合的な把握を目指すこととする。

①の遺存体については、まず、出土量や出土獣類に占める割合、出土状況、出土部位の偏り、年齢構成、骨の状態(破碎、被熱など)、傷などの項目を取り上げ、遺存体に見る文化ごとの特性を明らかにする。さらに、海獣狩猟文化が成立する以前の縄文時代から、海洋適応の度合を高めていく続縄文時代、オホーツク文化期にかけての利用内容を概観し、時期的変遷や地域差の把握に努める。

②の遺存体を素材とした製品については、素材とされた部位や製品の種類に基づいて分類を試みることとする。そして、文化ごとに出土傾向を見出した上で、縄文時代からオホーツク文化期にかけての時期的変遷や地域差を捉えることを目指す。

③の各種素材からなる動物意匠遺物については、イヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマを模したとされる意匠遺物を集成し、素材や動物意匠の作出方法、表現された部位に基づいて分類を行う。そして、文化ごとに出土傾向を明らかにした上で、その時期的変遷や地域差の把握に努めることとする。なお、本研究では、動物意匠遺物として報告された遺物のうち、模された動物種の認定が比較的容易な写実性の高いものを取り上げている。ただし、形態が定形化し、多量に出土している意匠遺物については、未製品や粗雑品も合わせ

て取り上げることにした。

以上の①～③の資料に基づいた検討を動物種ごとに行った後、それぞれの検討で明らかとなった出土傾向を総合して、動物種ごとの利用内容の特性や時期的変遷、地域差、飼養の有無やその程度、文化内での位置づけ、さらにはそれらの背景にある周辺文化との関わりや文化内での地域間関係を見出すことに努める。そして、飼養されたと認められた種については、それが飼養動物として選択された時代的背景や社会的要因、さらには海洋的な生活様式の中に動物飼養という生産活動が取り入れられた歴史的意義について、検討を試みることにする。

第2節 動物の骨格

本研究で検討対象とするイヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマの骨格は、以下に示す部位から成り立っている（エバンス他 1981 [1971]、加藤・山内 1995a、b）（図4）。

①頭蓋：頭蓋骨、顔面骨など

②胴骨：脊柱（頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、尾椎）、肋骨、胸骨など

③肢骨：前肢骨（肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨、指骨など）、

後肢骨（寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨、距骨、中足骨、趾骨など）

頭蓋は、脳や感覚器を囲む頭蓋骨と消化器や気道の一部を囲む顔面骨とに大別される。これらは複数の骨で構成されており（図5）、成長とともに一部の骨が癒合する。顔面骨に含まれる下顎骨は左右一対の骨であり、イヌ、トナカイ、ヒグマでは成長しても左右が癒合しないが、イノシシ類では癒合する。

歯は、4種とも、乳歯から永久歯へと一度生えかわる二生歯性であるが（後藤・大泰司 1986）、歯の本数や生えかわりの時期は種類ごとに異なる。本研究では、出生時から乳歯のみが萌出している個体までを「幼獣」、永久歯が萌出し始め、その歯根形成が完了するまでの個体を「亜成獣」、永久歯の歯根形成が全て完了した個体を「成獣」として区別することとする（註1）。

脊柱（椎骨）は、頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、尾椎から成り立っており、それぞれの個数は動物種ごとに異なる。頸椎のうち、第一番目を環椎、第二番目を軸椎と呼ぶ。肋骨は左右対称にあり、一部は腹側で胸骨と関節する。

肢骨は、前肢骨と後肢骨とに分かれる。前肢骨には、肩甲骨、鎖骨（註2）、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨、指骨（基節骨、中節骨、末節骨）などが含まれる。後肢骨には、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨、距骨、中足骨、趾骨（基節骨、中節骨、末節骨）などが含まれる。四肢長骨は、骨幹と骨端からなり、両者は薄い骨端軟骨で結合される（加藤・山内 1995a）。この結合部は、骨の成長が完了すると骨化（骨結合）し、ここではじめて1個の骨となる。骨化の時期は、動物種や部位ごとに異なるため（Schmid 1972）、死亡年齢段階

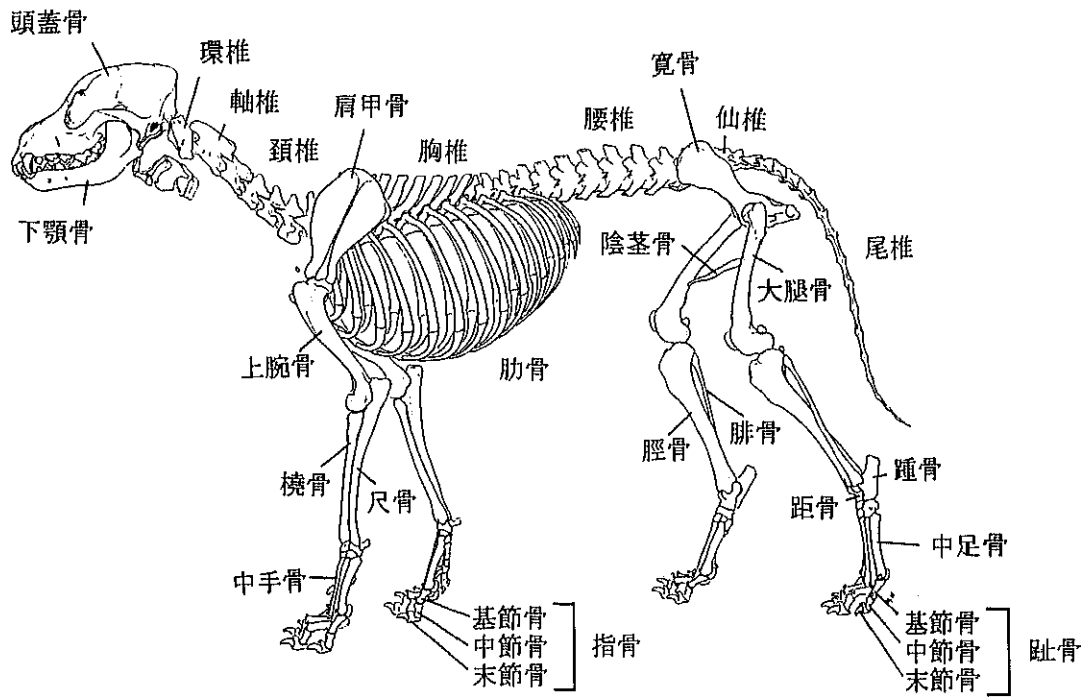


図4 イヌの全身骨格（雄）（エバンス・ドラウンタ 1981〔1971〕に一部加筆）

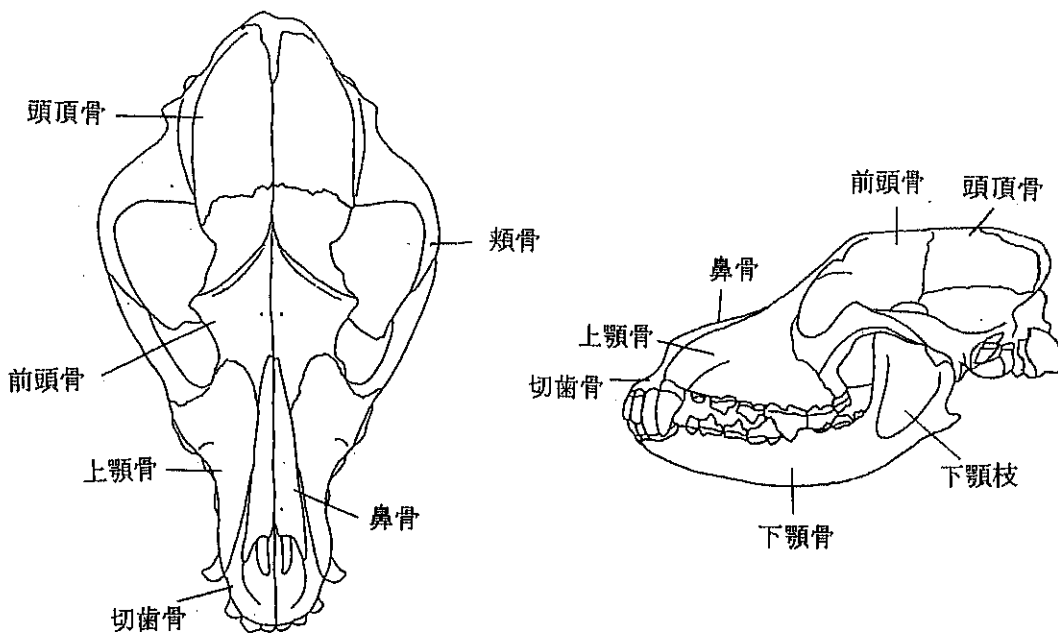


図5 イヌの頭部

の査定にも利用できる。ただし、この時期は、家畜化によって早まることがすでに指摘されているため (Bull and Payne 1982)、本研究では参考程度にとどめることとする。なお、本研究では、四肢長骨の骨化が両端ともに完了した個体を「成獣」、骨化途中の個体を「亜成獣」、骨化が両端ともになされていない個体を「幼獣」として便宜的に区分することとした (註 3)。

各部位骨におけるより詳細な部分を指し示すために、本研究では方位用語を用いる。心臓に近い部分を「近位」、心臓から遠い部分を「遠位」と表現するのも、この一つである。方位用語には、この他にも、頭方/尾方や、背側/腹側、内側/外側などの表現がある (加藤・山内 1995a)。本研究では対象資料に応じて、これらの方位用語を適宜用いていく。

第 3 節 編年

本研究で分析対象とした動物遺存体や、遺存体を素材とする製品、各種素材からなる動物意匠遺物は、土器に施された動物意匠遺物を除いて、いずれも単独では所属時期の特定が困難な資料である。これらについては、出土した層中に含まれる土器の型式に基づいて時期決定が行われているが、複数型式にわたる土器を含んだ層から出土している資料も多く、詳細な時期区分にのっとり検討を進めることは難しい。そのため、本研究では、基本的に、縄文時代を早期、前期、中期、後期、晩期の 5 期区分に、続縄文時代を前半期と後半期の 2 期区分に、オホーツク文化期を初期 (鈴谷期)、前期 (十和田期)、中期 (刻文期、江ノ浦期)、後・末期 (沈線文期、貼付浮文期、元地期、トビニタイ期、南貝塚期、東多来加期) の 4 期区分にし、可能な場合に限って、より詳細な時期区分に基づいた検討を行うこととした。なお、続縄文時代後半期とオホーツク文化期の鈴谷期と十和田期が北海道内で一時併存する関係にあることは、土器の共伴関係や型式的特徴の類似から明らかとなっている (松下 1965、泉・曾野 1967、石附 1976、札幌市教育委員会 1987)。

対象とする時代のうち、オホーツク文化の形成過程や年代観に関しては、研究者間での意見の相違が大きい。このうち、形成をめぐる問題については、その初期を鈴谷期と見る見解 (菊池 1971 (註 4)、前田 1976、山浦 1993) と、十和田期と見る見解 (大井 1973 (註 5)、天野 1977)、刻文期と見る見解 (加藤 1975、大塚他 1975) とに大きく分かれている。このうち、刻文期以降をオホーツク文化とみなす見解については、十和田式土器と刻文土器との間に系統関係が認められることや (前田 1976)、礼文町香深井 1 遺跡で示されたように十和田期から刻文期にかけての包含層が連続して堆積し、文化要素が共通することから (大場・大井編 1976、1981、天野 1977)、現在では否定的な意見が強い。鈴谷期と十和田期については、前田潮氏 (1974、1976) が主張するように、①海岸性の特徴を示す遺跡の立地や、②五角形ないし六角形のプランに近い竪穴の形態、③土器の口縁直下にみられる突瘤文列や深鉢形の器形、④小形有茎石槍や蛤刃石斧、⑤銚頭の形態的特徴、における共通性

や系統関係を認め、鈴谷期以降をオホーツク文化とみなす見解がある一方で、①十和田式土器の古段階に鈴谷式土器の要素がほとんど認められないことや(天野 1998)、②鈴谷期に大形の石錘を用いた大規模網漁を欠くこと(天野 1977)(註 6)などから、両時期の間に文化画期を見出そうとする見解もあり、議論は平行線をたどっている。

以上のような、オホーツク文化の形成をめぐる議論は、何をもってオホーツク文化を規定するのか、という文化設定の問題と密接に関わっている。現在までのところ、同文化の主要部分を包蔵するサハリン側での資料が限られているため、形成過程の具体的な復元や規定概念の提示は、今後の課題として残されている。なお、本研究では、生活基盤となる住居形態や生業に関わる道具類などの文化要素が両時期に共通して認められることを重視し、鈴谷期をオホーツク文化期の初期と位置づけた上で、検討を進めることとした。

オホーツク文化の土器編年は、伊東信雄氏(1942)の業績が基礎になっており、その変遷自体については大筋の合意を得ている。しかし、地域ごとに多様な展開を遂げた土器型式の詳細な併行関係や絶対年代については、土器の型式学的対比や、周辺文化に由来する遺物との交差年代(註 7)、¹⁴C年代測定結果(註 8)を加味した見解が数多く出されており(大井 1981、右代 1991、熊木 2004 など)、研究者間で意見の一致をみていない部分が多い。本研究では、前田潮氏の編年試案(2002)を基に、表 1 に示した編年表を用いることとした。なお、アムール河中・下流域の文化編年は、臼杵勲氏(2004)による検討に基づいている(註 9)。

註

- (1) 歯の萌出・交換の観察から導き出される年齢区分は、性的成熟を加味した動物学上の年齢区分とは一致しない場合が多い。そのため、ここで推測された死亡年齢構成から利用内容を検討していく際には、注意する必要がある。
- (2) 4 種の中ではイヌのみに存在する。
- (3) ①四肢長骨の骨化状況に基づく年齢区分と、②歯牙の萌出・交換に基づく年齢区分、③性的成熟を加味した動物学上の年齢区分は一致しない場合が多い。3 者の対応関係などについては、今後、動物学者との連携を通じて明示していく必要があろう。
- (4) 鈴谷式土器のうち、櫛目文・縄目文土器に短刻文土器が相伴している段階を、オホーツク文化期の最初期に位置づけている。
- (5) 大井晴男氏(1973)は、鈴谷式土器の一部をオホーツク文化期の初期に位置づける菊池俊彦氏(1971)の説の可能性を認めた上で、資料がまだ不十分であるため、結論を留保すると述べている。また、同氏の 1981 年の論考の中では、サハリン南部のスタロドゥブスコエ 2 遺跡(Козырева 1967)を取り上げ、骨角器や動物遺存体の少なさを認めつつも、大規模な住居址を残すことや、竪穴群が長軸を揃えて横に並列するような配置をとることなどから、この時期にオホーツク文化的な文化複合がすでに成立していた可能性は小さくないことを指摘してい

る。

- (6)サハリンでは、プロムイソロヴォエ 2 遺跡 (Сафронов et al.2001) のように、割合大形の石錘が出土している遺跡もあるが、ススヤ遺跡 (Васильевский・Голубев1976) やアジョールスク遺跡 (Васильевский・Голубев1976) のように、その出土が認められない遺跡も少なくない。このことから、大形石錘の有無は、遺跡周辺の自然環境や動物相の差異に基づいた適応形態の違いを反映しているのであって、オホーツク文化の規定概念とは成り得ない可能性がある。なお、大形石錘については、昆布採りの道具と見る見解もある (大井編 1982)。
- (7)モンテリウス氏 (1999) [1932] は、遺物の併行関係の「確実性」は、共伴例が多くなければ主張することができないと述べている。同氏の述べる 30 回以上という数字が有効かどうかはさておき、オホーツク文化の遺跡から出土する周辺文化由来の遺物の中で、それほど多くの共伴例が認められている事例は少ない。
- (8)近年、AMS による ^{14}C 年代測定に基づいた弥生時代の開始年代をめぐる議論が活発に行われている。本研究の対象地域でも、この方法による年代測定が多く試みられているが、特に、土器に付着した炭化物を資料とする場合には、オホーツク海で約 1,000 年というデータもある海洋リザーバー効果による影響 (藤尾・今村 2004) を無視することはできない。
- (9)アムール河中・下流域でポリツェ文化に後続する「靺鞨文化」や「女真文化」は、文献史料に記された名称をもとに設定された文化である。これらは考古学的に設定し得る文化とは必ずしも整合しないため、臼杵氏 (2004) は、これらを「同仁系統」と総称して、土器や方形透彫帯金具の形態から、変遷過程の把握を試みている。

表1 本研究で用いる編年表

